

猛暑お見舞い  
申し上げます



## 東京都議選・自公の壁を破る

### 衆議院選に臨む私たちの課題は!!

東京都議選が終了した。残念であったが社民党は候補者を擁立することができなかった。しかし、自・公の壁を大きく破ったこと、とりわけ「野党共闘」が発揮できたことは成果であった。そのことは、東京五輪の開催を政局に結び付け、菅首相自らと自民党政権の延命を図ろうとしたことに対する国民の不信と憤りが、その強引な政治の在り方に「ノーの意思」を明確に示したものと受け止めたい。そのことが23日の開幕を目前にして、一転「無観客開催」を決定せざるを得なかった菅内閣の混迷ぶりであり、もはや「政府の体」をなしていないことの証明である。

そして今秋に控える衆議院選挙がある。

コロナ禍の終息は見えないばかりか、「陣太鼓よろしく、ぶち上げたワクチンの接種」も、見通しの甘さに供給不足も加わり、全国における第二回目の接種率は7月16日現在で僅か20.27%である。そして開催目前を控えての東京都に対する「緊急事態宣言」に加えて、メイン会場である東京都内をはじめとした全国各地においては「無観客開催」となった。政権浮揚戦略としての東京五輪が窮地におちいった現在、菅政権がとるであろう

「秋の衆議院選」に対する手段を考えてみたい。

それが、仮に「第二回目の特別一時金の支給」であるとすれば、それによく耐える国民的総意の結集を今から準備をする必要があるだろう。

### 先が見えない介護・全国平均4年7カ月

同時に私たち「OB・Gの会」は高齢者の組織である。当然にして今日の「高齢化」にあたって、残された老後の補償に強い関心を持っている。そのことが衆議院選挙に向けた私たちの要求の大きな柱にしなければならない。

よってニュース8月号は、この問題についてあらためて考える編集を試みた。

現在、日本人の平均寿命女子86歳・男子80歳と言われている。私たちの親の時代では考えられなかった「高齢社会」である。

しかも寿命を延ばしているだけではない。普通の生活ができていない「元気高齢者」の多いのも事実ではあるが、いつかは老化に直面する。それは「確立100パーセント」である。また、若年認知症など年齢を問わず「介護」をめぐる問題が深刻な問題になっていることも認識しなければならない。さらに前号でも触れたが18歳未満の子どもが、学業を犠牲にしながら親の介護にたずさわる「ヤングケアラー」の問題もある。そしてここにきて政府は、

今まで実施をしてこなかった小学生のケアについての調査を行い、働いている親に代わって年下のきょうだいを介護する小学4年生、あるいは「精神疾患の母親」をサポートする小学3年生という実態を明らかにした。(毎日新聞・7月6日)

そして中でも多重介護の悩みが顕著になっていることにも注目しなければならない。このことは「長寿」と重なる深刻な事実である。つまり「実の親と義理の親」、「親と配偶者」など、1人が複数の家族を介護する「多重介護」が増えている。よく言われる「先が見えない介護の期間」が悲しい事件を生み出している。「生命保険文化センターの調べによれば、介護期間は平均54.5カ月(4年7カ月)」という調査報告がある。

### 「晩年をよりよく生きたい」の望みを持つ

介護保険制度が施行されてから20余年になる。それまでは「介護は『嫁』の仕事」という習慣になっていた。そのことが無報酬の不払い労働(介護労働)という悪しき習慣を生んだ。しかし、介護保険制度の誕生はこの習慣を破り、しかも「自宅から施設での介護」という形態に移り、「誰もが、いつでも、どこでも必要な介護が受けられる」という国民の権利としての制度が生まれた。にもかかわらず述べてきたように、今もって、前時代的な「老人問題」として扱われる域を出していない。

晩年をより豊かに過ごしたい。その望みを、政治に託すことには何のためらいがあるだろうか。

第48回衆議院選挙に臨む私たちの政治課題にしたいものである。

(文責・降矢)

## 【寄稿】

### 「コロナ禍・東京五輪の

### 動きの中で世界を見る!!

東京で都議選が終了をしました。社民党から一人の立候補者も出ていないこと、寂しい限りでした。また、コロナ騒動の中の「オリンピック開催」は、たとえ無観客であったとしても、菅内閣の動きに大きな憤りを覚えます。

その東京オリンピック開催に関してドイツの新聞も種々報じておりました。例えば「ベルリン・モルゲンポスト」紙は「デルタ・コロナ・ウイルスの亜種拡散で東京でのオリンピック開催は危険―」の見出しで、「今回の東京オリンピック開催の迷走、これまでにかかる例は無し―」、「多くの国々が新型コロナウイルスで苦しんでいるにも関わらず、IOC・東京オリンピック委員会等の《オンライン五者協議》で最大一万人の観客数で開催を決定」、「日本国民の多数が明白に開催に反対している」。「東京でのオリンピック開催、(日本)国民の意見よりスポンサーが大切だからである」。「開会式は関係者の参加でも総計2万人となろう」などなど。

フランクフルトアルゲマイネ紙は、朝日新聞の世論調査の結果(開催反対、32%、開催時期の引き延ばし、30%、無観客での開催には53%)を報じ、「結果として入場制限などで大幅赤字が予測されるが、オリンピック本部、スイスのローザンヌ本部のバッハ会長にとっては、観客制限などによる損失は関係がない。開催こそ大切なのだ。何故なら放映権収入、世界へのテレビ中継による収益があ

るからだ」と。

更に私が失望し、そして大きな驚きを持ったのは、G7サミットを終えて帰国した菅首相の記者会見でした。声高に、かつ誇らしげに「オリンピック開催についてG7の首脳達の全面的な賛同を得た!」との発言でした。「G7会議」中の動向をドイツのテレビを中心に注意深く追っていました。菅首相の影が薄く、まったく首脳会議参加の体(てい)をなしていませんでした。菅首相本人が一番それを感じていたでしょう。『人間力』がない政治家は、国際舞台で勝負できないのです。

私自身、欧州での多くの国際会議の通訳を通じてきた経験から見えたことは、「完全に蚊帳の外におかれていた」のが菅首相でした。EU離脱で評判の落としている、暴れん坊のジョンソン首相、就任したばかりのバイデン大統領、来年の大統領選挙に向けてのバーフォマンズだけのマクロン大統領、その中で自信をもっているメルケル首相。G7参加は15回目。そして最後の花道としての場、さらにメルケル首相の長年の同僚、フォンデアライアンをEU委員長の「送り込み」に成功し、その同僚と一緒にのG7会議でした。ドイツは、「対中国政策」に関して、フランスと同様に「一定の距離を置く賢さ」、それぞれの思惑の中での「闘いの会議」でした。唯一菅首相が果たした役割は、米国が先導し、それに沿って書いた外務官僚の「対中国対抗策」を読み上げた事だけでした。

“全く影の薄い”菅首相、ドイツのTV報道、様々なG7首脳の写真の中でも、「菅首相は何処に?」

が率直な印象でした。G7会議では常に傍役の位置の菅首相、そうした状況とコントラストなのがすでに指摘した、菅首相の「東京五輪・パラリンピック開催に、全首脳から大変力強い支持を得た」と声高々の帰国記者会見でした。「G7サミット首脳宣言」の最後に「東京五輪・パラリンピックを支持」となっておりますが、「支持」であって「賛成」ではないのです。

以上、今回のG7会議での菅首相、そして彼の帰国記者会見での発言とのコントラスト、大きな憤りを感じております。

百済 勇(元総評本部書記)

## 【一寸ひびく・気づいたこと、感じたこと】

### 76年前の記憶。仙台市無差別攻撃の翌朝

1945年(昭和20年)7月10日午前0時。日本の敗戦五日前のことである。米軍のB-29、123機の大編隊が仙台市を襲いかかった。無差別爆撃であった。そこで今も、私の頭から離れない記憶がある。郡山も「空襲警報」が発令された。私たちが親子4名は近くの防空壕に避難をした。現在の郡山市労働福祉会館。当時は県の出先機関であった「安積地方事務所」であり、そこに「防空壕」が掘られていた。ものすごい爆音に驚き、そして見上げた夜空には「大きな黒い絨毯」の塊が東の方へ飛んで行った。そして朝のラジオが「仙台市全滅」というニュースを流していた。「黒い絨毯はB29爆撃機」だったのである。

我が家には非常食として白米2升を甕に入れ床下に埋めていた。母はその朝、その米を全部炊き上げた。「もうこれで終わり、そうであれば全部炊いて子どもに食べさせよう」と考えたのであろう。そんなこともつゆ知らず、久しぶりの白米にかぶりついた子ども三人をどのような思いで見ているのだろうか。76年前の記憶である。

### 弱者の側に立つ労働組合の顔が見えない

「立場の弱い人をどう処遇するかでその組織の本質やホンネが見えてくる。最近、新型コロナウイルスのワクチン接種で正社員を優先し、「非正規」らを差別する企業もあるようだ。感染防止の観点からも問題が多く、厚生労働省は雇用形態により対象者を区別しないよう求めている。だが私が知る限り、一部メディアの中にも、職域接種で非正規従業員を無視する扱いをしているところがあるようだ。彼らが日ごろ強調する大義（人権、平等など）に疑念を抱かずにはいられない」。

（火論「弱者」処遇と大義 II 大治朋子より）  
これは7月13日毎日新聞の記名付き記事の前文である。そして考えた。日本の有力企業でも従業員の人命にも及ぶ不祥事件をはじめとした記事が多くなっている。また、記事にあるメディアにも、また有力企業にも労働組合があり、しかも日本の労働運動に大きく影響をする大組織でもあるにもかかわらず、立場の弱い人を守る大義を果たす労働組合の「顔」が見えない。これはいったいどうしたこと

なのだろうか。大治氏の指摘同様、私も疑念を抱かずにはいられない。

### それでもあなたは日本の代表だったのですか

安倍晋三前首相は、東京オリンピック・パリオリンピックについて「歴史認識などで一部から反日的ではないかと批判されている人たちが、今回の開催に強く反対している」と批判した。具体的には共産党や5月の社説で中止を求めた朝日新聞を挙げて「彼らは日本でオリンピックが成功することに不快感を持っているのではないかと述べた。

（月刊誌・nanada8月号）

反日とは「日本や日本人に反感を持つこと」として使われている世界的通用語である。であるとすれば、毎日新聞の世論調査（6月19日）でも「中止・再延期」が42%、読売新聞でも「中止」が48%と報じているのはどのように見ているのか。調査に答えた皆さんは、「コロナ禍は収束せず、ワクチンの遅れ、感染の再爆発と、結果としての医療崩壊を懸念しての開催中止、延期を求めている。そのことを「反日的」という物言いは何なのか。しかもそれが前総理大臣である。許すことができない。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

### 【ニュースを読んで】



■ 厳しい状況が続きます。起死回生の逆転満塁ホームランはなかなか思いつきません。あせらず休まず、次につながることを一歩づつと考えています。

■ ニュースは印刷して党员等へ配布します。私も二回目のワクチン接種が終了しましたが、さらに

感染防止に気をつけようと思っっています。コロナ感染がまた増えてきました。人々の動きが活発したことで当然のことと思います。いくら「気を付けろ！」と言っても馬耳東風の人々のいかに多いことかと嘆かわしい思いです。特に若い人々がSNSのデマを真に受け、ワクチン接種をしないと云っていることが報道にありましたが、新聞・TVのニュース（最近のマスコミは右傾化し政府与党への忖度が顕著ですが）をほとんど見ずに、スマホでSNSデマのみを見て誤った意識をもちデマを拡散する愚かな行動に走っていることは非常に恐ろしいと感じています。さらに、このような人達は、そのことを自慢げに話している傾向があり、反動政治に利用されていることに暗澹たる気持になります。私たちがニュースやチラシ等で正しい情報を伝えてゆく使命があります。今後も頑張つてゆきましょう。

■ 社民党を離党し社民Fに移行した方から「ワクチンは危険」とのネット情報や書籍を基に学習会の提起があり、「市政を考える会」（社民党と社民F合同で継続）で開催でしたが、既に接種が始まっていることもあり「関心」は薄い状態でした。また、日常生活（添加物・遺伝子組み換え食品・反原発と訴えながらも大量電力消費等）を見直すことが問われますよね。確かに「選挙」のために政府は躍起になっていますし、異常なまでの「総動員体制」です。自治体の職場でも、土・日限定の「集団接種」は行政の措置と受け止め「超過勤務にすべ

き」との認識を持つ労組関係者もいます。また「接種そのもの」に懸念を持ちながら「接種を促す仕事」に従事することへのストレスを感じる人もいます。また党の衰退が、この度の分裂騒動につながり、騒々しく動いた時を振り返り、一政党の問題として捉える事も必要かと思えます。

■政治の流れの危険性に、警鐘を鳴らしている多くの人がいます。社民党の一員として、勢力が弱まったから、合流だ…の考えに陥らないように、老境に入り、握力もなくなりましたが、こぶしを握り締めていきたいと思えます。

■原発事故から10年、内堀県政の与党であった事の反省、総括は一体誰がどのように始末をつけるのでしょうか…「あの時は仕方なかった」、などは聞きたくありません！

■コロナ騒動で何かと季節等の感覚が鈍っています。小生も今月の24日に一回目のワクチン接種をいたしました。特段の体調変化は有りませんでした。若干接種場所の腕が痛い感じがありました。オリンピックも強行実施、そしてコロナのリバウンドが懸念されます。それにしてもOCCの「コマースバルベース」に押されている気がします。

■この国の行方、劣化の一途、何としてでも今度の衆議院選挙で少しでも変えたいものと頑張っています。身体が云々ことをききません。私もついにワクチンを接種することを決意し、7月中旬に二度の接種日時がきました。何事も、おきないようにと祈っています。

■「夫婦同姓は、婚姻の自由を定めた憲法24条

に違反しない」という最高裁判決には心底失望しました。「選択的夫婦別姓」は又も否定されました。右翼的な菅自民政権におびえ、最高裁が付度した結果だと思えます。三権分立もどこへやら本場に情けない国です。ジエンダーフリーやジェンダーギャップがよく目につくようになりましたが、革新政党や労働組合も男女同権と女性の地位向上に、一歩踏み出す時が来ているような気がします。連れ合いの認知症で、炊事場での共同作業をする機会が増え、特に感じる今日この頃です。オリンピックどころではない、人の命の緊急事態が起これいそうな怪しい雲行きに、心も晴れません。

■第5波襲来の可能性が大きいのに有観客にこだわる政権を見ていると、ほんとうにどちらを向いて仕事をしているのか、と思えます。国民に向けて丁寧な説明をするならまだしも、まったくその努力や誠意すら見せる気配がありません。そうしなくても、長期政権は続けられるというおごりがあるのだとすれば、これほどの愚弄はありません。おつしやる通り、その矛盾がまさに目に見える脅威となり、だれもが身近に感じる今のような時こそが、チャンスなのだろうと思えます。野党共闘は、努力しているところでは、着実に実を結んでいると思えます。その小さな芽が、やがて全国に広がることを願ってやみません。私の住んでいる町でも、これまで受験の予備校だった教室が閉鎖し、その跡地に、リハビリやマッサージ業の店ができるという例が増えました。町全体が高齢化しつつあることが、風景に読み取れます。先日、今いる女性の半

分以上は50歳以上という新聞記事を見かけましたが、さもありません、と思えます。昔の尺度で見ていると、情勢を見誤るといふこともあるでしょう。ただ、社会が変わっても、変えてはいけない価値や考え方もあるだろうと思えます。それは、太古や縄文の時代もそうであったし、封建時代や近代に入ってからもそうだったはずだと思います。利便性や成長神話によって、その価値観を曲げようとする者たちに対しては、昔と同じように反撃し、批判しなければいけない、と思えます。

■東京都議選ですが、自民の票が伸びなかったことはいいのですが、それを手放しで評価する気にはなれません。オリンピック、コロナの問題に限らず、モリカケはじめ自民政権に疑問を抱いた有権者は多いのでしょうか、その票の受け皿が都民ファーストでした。都民ファーストが公約に「無観客」をあげただけではなく「保守の票が同じ保守に流れた」としか見えませんでした。共産、立民は選挙協力で議席を伸ばしたとはいえ、票の受け皿になり得なかったことだと思えます。衆院選へ向けて野党も都議選の結果の分析と今後の戦略の再検討をして欲しいと願うばかりです。

■報告の中に、議会に対しコロナ問題で「閉会中審査」を提起しましたが姿が見えませんでした。ありました。福島もすべてとは言いませんが、市議を経験した者として諸々提起をしましたが応えが返らず残念に思っています。



